



学習会「防ごう！子どもの事故

～くらしに潜む危険を考える～」を開催しました！！

今年で4回目となる、千葉市との千葉県消費者団体ネットワーク強化・活性化事業による共催学習会を、11月25日(土)に「パルひろば☆ちば」において開催しました。

今年度は「防ごう！子どもの事故」と題し、講師にNPO法人 Safe Kids Japan 理事で、国立研究開発法人 産業技術総合研究所人工知能研究センター 研究員の大野美喜子先生をお招きし、乳幼児をはじめ、子どもの家庭内などでの重大事故を未然に防ぐために必要な大人の視点や対策について考え、学ぶ事を目的に開催しました。参加者は22人でした。

今回の企画は千葉市のほか、子育て支援をおこなっている地域生協(なのはな生活協同組合、生活協同組合コープみらい、生活協同組合パルシステム千葉 生活クラブ生活協同組合(千葉)の共催と淑徳大学に後援いただきました。(文責 事務局)

◆開会挨拶 千葉県生活協同組合連合会 尼崎 英之 専務理事

生協の基本は「組合員の願いを商品や事業、活動を通じて実現すること」にあります。特に「人々が安全に暮らしてゆける社会の実現」は最重要課題の一つであり、未来を担う子どもたちが健やかに育っていくことは、社会全体の願いでもあります。本来子どもが守られているはずの場所でのような事故が発生し防げばよいのか、皆さんと学びたいと思います。



◆講演 データに基づいた目を離せる環境づくりの実践 大野美喜子先生

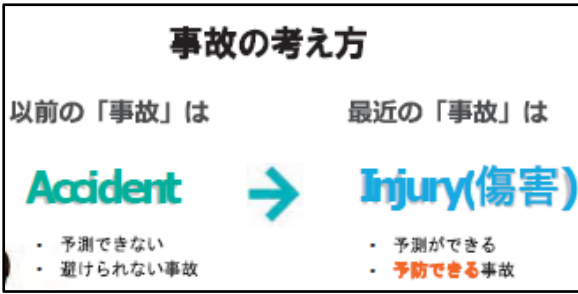
乳幼児から小学生といった子どもの死亡原因は、事故が現在第2位です。しかし、事故が病気より多い年代もあります。最近ニュースでも取り上げられています。ベランダからの転落事故も多く、今後消費者庁が調査を始めるようです。



見守りだけで子どもを救うのは、ほとんど不可能です。

確かに子どものことは親に責任があるかとは思いますが、WHO(世界保健機関)の2019年の報告書には「子どもの事故防止に対する見守りの効果は、科学的な根拠は限られている」と記載されています。これは「見守りの事故防止のための効果は明らかでない」ということです。例えば、産業総合研究所で調査したところ、子どもが転倒するまでの平均的速度は0.5秒から0.6秒でした。その時、大人が手を差し伸べられる時間は約0.5秒。3mの高さから転落した場合、地面に接地する時間は0.7秒。大人が転落で救える時間は約0.8秒くらいです。電気ケトルでのやけども、ポットを倒してから入院するようなやけどを負うまで5秒から10秒程度しかありません。親は家事をしながら子どもを見守らなければなりません。家事の種類、家具の配置などでも、見守りが大きく左右されます。近くで見守っていても、子どもを救える時間はほとんどありません。

まずは、事故は予防できることを知ろう！



子どもの事故についての考え方は、以前は予測できないもの (Accident) でしたが、最近では予測も予防もできる傷害 (Injury) と大きく変わってきました。「事故は予防できる」ということをしっかり認識することが、事故予防を広める上での第一歩だと思います。

「変えられるもの」を見つけることが大切です

事故が起こる前に何か対策をすることを「予防」と言います。事故は、年齢、性別、発生場所などいわゆる変えられないものと語られることがほとんどです。変えられないものも理解しつつ、その中で「自分たちで変えられるものは何か」という視点を持つことが非常に大切な活動になります。傷害予防の世界的な考え方として、変えられるもの「傷害予防の3E」(Education(教育)、Environment(環境改善)、Enforcement(ルール作り))が、事故予防に有効だとされています。中でも特に一番有効なのは、目を離してもよい環境づくり、環境改善(パッシブ戦略)と言われています。アメリカでは、子どもが蓋を開けにくいチャイルドレジスタンス付き瓶を使用し、事前事後での比較で薬物中毒が70%以上減少しました。

目を離してもよい環境づくりをしましょう！

日本ではまだ「子どもから目を離さないでいましょう」というメッセージが良く出されていますが、本来は「目を離してもよい環境を作りましょう！」というのが正しい方向だと思います。家庭内で一番多い子どもの事故は「誤飲」です。ボタン電池やパック型洗剤などは、手の届かない場所に置くことが基本ですが「手が届かないところ」と言っても、みんな違います。計測し科学的に置く場所を決めることが大切です。また、窓・ベランダからの転落は、今は補助錠を付けることしか方法はありません。ドアに指を挟まないように指ストッパー、テレビの転倒防止グッズ、階段からの転落防止柵などを使用することもお勧めします。

ミニトマトやブドウの窒息は、切って食べさせる、また、給食のパンでも窒息事故が起きているので、小学生には親が食べ方を教えることも良いと思います。

子どもの事故は、個人の責任や実行不可能なことでもやらなければならないルール、また注意喚起をするだけ、事故が起こった時だけでその一瞬だけで終わらせてられている現状があります。皆でどうやったら予防できるかを一緒に考えていく事が求められていると思います。

意味のある事故予防(3E's)と役に立たない事故予防(3I's)

	3E's 意味のある事故予防 Effective Injury Prevention	3I's 役に立たない事故予防 Ineffective Injury Prevention
取り得る、もしくは、現在取られているアプローチ	Environment (環境改善) 電気ケトル、炊き炊きライナー、高熱レス炊飯器、薬型染収材、ヘルメット	Individual (個人責任・モラル・非システムの) 薬液感不足・自治体課員・校長先生処分・保護者責任
	Education (教育) 環境改善を促す教育、定量的な情報提供、ツールの使い方教育、石の3Eが無力であることへの教育	Impossible (実行不可能・非科学的) 0.5秒閉鎖、注薬による見守り 目を離さない
	Enforcement (法律・基準) シーベルト規制、飲酒運転禁止、煙感知器設置、遊具の規格制、自転車チャイルドシート、ベビーベッド	Instant (即時的・その場しのぎ) 周知徹底、強制規定、意識「一歩ベタだ」と言うだけ、SafetyUp付後、騒いで寝る

◆閉会挨拶 千葉市消費生活センター 高澤賢一所長

消費者庁のホームページやメール配信サービス、Xなどでも様々な子どもの事故に関する情報が発信されていますので、ぜひご覧ください。特に製品に原因があると思われる場合には、千葉市消費生活センターにご連絡ください。

以上

